第19弾

われわれの時代

A「今回の対談は展示テーマにちなんで「私の時代」！みなさん、印象に残っている本などはありますか？」
M「図書館員のＮさんと同世代でほぼ読んできた本がいっしょ。その中で話題になったものとして『まんが家マリナ』という本がある」
F「シリーズものですか？」
M「うん。基本はミステリーなんだけど。売れない漫画家のマリナが行く先々で事件に巻き込まれてそれを解決するという。外見はさえない感じなのに、性格がめっちゃ良くて出てくる美形たちにモテまくる」
F「周りが美形だらけなんですね」
M「本命は黒須和矢って子なんだけどね。ほかにもシャルルっていうIQ300とかの天才がいて事件を華麗に解決してくれたり。」
A「シャルル・・って日本人じゃないんですか！？」
M「フランス人。けっこうワールドワイドなのよねー。決め台詞は*「たとえ太陽が西から昇っても、この俺に間違いは無い」*」
F「(笑) お、おもしろそう。ぜひ読みたいです。所蔵ないんですか？」
M「残念ながらほとんどないわねー。シャルルのスピンオフ、『鑑定医シャルル』っていうシリーズならあったわよ」
A「書庫で見ましたけど、けっこう本格的なミステリーでした」
M「とにかく、私の時代は女の子はみんなコバルト文庫とティーンズハートに夢中だったの。キーワードはトキメキよ！トキメキ。」
A「私の時代は電撃文庫ですね。『ブギーポップは笑わない』とか」
F「私は『灼眼のシャナ』かな？私たちの時代はいわゆる「セカイ系」がはやっていたのではないでしょうか」
M「セカイ系って何？？」
F「えーっと。実は具体的な定義はないそうです。調べたら、『語り手が身の回りの日常を「世界」と表す物語』というニュアンスみたい。諸説あるらしいので、気になる人は調べてみてください」
A「『とある魔術の禁書目録』のように異能力バトルものが多いです」
M「・・・・トキメキはどこにいったの？」
A「と、トキメキといわれましても・・・」
F「とくに求めてないですからねぇ」
M「なんでよ！トキメキの超能力とかはないのー！」
F「ありません！そんなものは！」
A「えっと、みなさん続きはブログで・・でいいのかなぁ？」

←続きはブログで！http://sanda-city-lib-ya.sblo.jp/

Volume.26
YA通信

HONDARAKE

H30.6.1

再びやってきたＹＡ担当それぞれによる棚プロデュース企画。今回のテーマは年齢がほぼバレまくりというリスクをしょって、討死覚悟で挑みます。
コラ、そこ、計算してるんじゃない（怒）

私のやんぐ時代

「夢見るように、愛したい」

折原みと　講談社ティーンズハート　1988年刊　Ｆオリ

ピンクの背表紙に少女漫画のイラスト。ティーンズハートというレーベルはトキメキ少女たちに絶大な人気でした。改行がやたら多くて学校にいる間に１冊余裕で読めてしまう手軽さもポイント。文章はもちろん「あたし、高校１年生。カレシ募集中なんだ♪」みたいな一人称。これお約束。さてこの本は、事故で天国に行きかけた桜子が、可愛い天使のリョウくんと生涯の恋をする７日間のお話。当時はみんなで「泣ける泣ける」と言いながら読んだっけな。月日が流れて、閉架書庫でページが茶色に変色していても残っていてくれたこの本に感激です。

ホンダラケとは

本誌は、読者の身も心も「本だらけ」にしてやろうという心意気から生まれた中高生向け小冊子です。本誌に登場する本は全て三田市立図書館本館のＹＡ（ヤングアダルト）コーナーでご覧いただけます。
２か月に１度、年６回発行予定です。
ホンダラケは皆様の投稿をお待ちしております。ＹＡコーナーに用紙・ポストがございますので、おすすめ本や本誌の感想・要望などお寄せ下さい。

青春読書記

～三田学園図書委員会より愛をこめて～

三田学園図書委員YA担当のセンボクです。この企画もはや４年目。
短いような長かったような気持ちを、この記事を執筆している時ふと感じました。
今年も学生パワー全開で青春読書記を作り上げていくのでよろしくお願いします！

高校２年　センボク

今回のテーマは「はな」

花戦さ

鬼塚　忠：著　2016年刊　KADOKAWA　F/オニ

1582年、本能寺の変。物語は第六天魔王織田信長が業火に包まれ自害する場面から始まる。花の名手・池坊専好は六角堂で花を立てる日々を送っていたが、親友・千利休が関白秀吉の命で非業の死を遂げ「花」で復讐を誓う。

歴史小説ということで堅苦しいイメージを抱くかもしれませんが、当時の言葉にリアリティーがありスラスラ読めます。また、舞台は血生臭い戦国時代ですが、華道・茶道などの日本の文化の精神の一角に触れることもできます。

時代は違えど専好と利休の友情は現代での「親友」とあまり変わらないと感じ、感動しました。

リサイクル予備軍 ～なぜ君は借りてもらえないのか～

Mind's Eye　マインズ・アイ

ポール・フライシュマン：著　片岡しのぶ訳　あすなろ書房　2001年刊

ベデガー旅行案内書（1910年版）を片手に…

ページを開くとまず困惑するかもしれません。始まるのは小説ではなくて劇だからです。思うに2006年からずっと貸出がないのもこれが原因かも。「一体どういう状況！？」と思うかもしれませんが、読み進めてみて。

主人公は落馬で下半身不随になった１６歳の少女・コートニー。療養所に入った彼女と同室になったのは、８８歳の元教師・エルヴァでした。歩けないことに絶望しているコートニーに、エルヴァは「いっしょに旅に出ましょう」と声を掛けます。イヤイヤ、満足に動けない二人がどうやって？

最初は相容れなかった二人の関係の変化、そしてコートニーが生きる希望を取り戻すまでの旅路がみどころです。

932/フラ

ホンダラケポストの投稿を紹介するコーナー⑮

『Bの戦場　さいたま新都心ブライダル課の攻防』ゆきた志旗

主人公が絶世のブスなんです。そして美形上司に求婚されます。ブスなのに。すごいブスなのに。心は美しいのにすごく顔がブス。読んでて、「ブス」がゲシュタルト崩壊。ラノベっぽくて読みやすいです。

P.N.ブスもきわめたら芸術なのか？　さん

F「結構前にいただいた投書です、ありがとうございます。諸事情あって読むのが遅れましたが、きっちり読ませていただきました！」

A「インパクトある投稿用紙でしたね…こんなにブスって書いてある文面はそうありません。で、どうでしたか？」

F「うん、確かに読みやすかった。恋愛小説、というより１巻はお仕事小説みが強かったですね」

M「結局世の中顔がすべて、みたいな？」

F「そんな内容じゃないことは保証します(笑)美形上司がブスなヒロインに愛情アピールをするのですが、それがヘタすぎて笑ってしまいます。ブライダルのお仕事について書いてあるので、その方面が気になる方はぜひ！」

F/ユキ　2016年
集英社オレンジ文庫

YA世代のために血を吐く思いで名作を紹介するコーナー

『ビギナーズ・クラシックス日本の古典』

角川ソフィア文庫

古典コーナーに、新しいシリーズが仲間入りしました。その名も「ビギナーズ・クラシックス日本の古典」シリーズ（の一部）。『竹取物語』など昔から日本人に愛されてきた作品を、親しみやすい形にしているこのシリーズ。オシャレな表紙が目を引きますが、中身も原文、現代語訳、解説と並んだ親切設計でまさに初心者にぴったりと言えましょう。スラスラと現代語訳を追ってもよし、気に入った箇所は原文を味わってもまたよし、コラムだけを読んでも楽しい、色々な使い方ができるシリーズだと思います。古典だからと嫌厭せずに、興味があるものに手を伸ばしてみてください！

『竹取物語』角川書店編　2001年刊
『古今和歌集』中島輝賢編　2007年刊

913.3/カド　911.1/ナカ